# ある日見覚えのない姉と妹と幼馴染がいたら

陽田城寺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある日見覚えのない姉と妹と幼馴染がいたら

【Ｎコード】
Ｎ１７８９Ｖ

【作者名】
陽田城寺

【あらすじ】
平凡な高校生である灰国敬がある日目覚めると、見知らぬ姉と妹と幼馴染が！！　けどそんな状況を普通の人である敬が楽しめるわけもなく……。
推理のような学園モノのようなラブコメのようなどれでもない、よくわからない作品誕生！

# 一章・姉と妹と幼馴染

俺の名前は灰国敬（はいくにけい）。間違いなく灰国敬だ。
高校二年生、七月九日生まれのかに座でＡＢ型。ガンシューティングゲームが趣味の、自分でいうのもなんだが、ちょっと陰がある男だ。
街角で百人に俺が灰国敬かと尋ねたら、十人ぐらいがイエスといって、残りは誰それ？　と言うだろう。
『いきなりこいつは何を言っているんだ？』とお思いの方、要するに俺は自分が間違いなくその『灰国敬』という高校生かどうか自信が持てないのだ。
家族は父親一人。灰国定（はいくにじょう）といって一緒にガンシューをやる仲だ。
今まで十六年間、家族は父さんと俺だけだったはず。他に兄弟がいたなんて記憶はない。
それが今は――

――朝、ベッドで寝ていた時に何者かが俺に乗っかってきた。
「お兄ちゃん！　朝だよ、起きないとご飯冷めちゃうよ！」
と、いわれてすぐに侵入者を掛け布団ごと振り払い、距離をとった。
時計を見れば朝七時。いつも起きる時間だ。
侵入者は髪をおさげにした女の子。小さな体を見ると恐らく俺より年下だという事が分かる。だが一度も会った記憶がない。
「……お兄ちゃん？　顔が怖いよ？」
「お兄ちゃん？　誰だお前は？」
目の前の女は顔を緩ませながらじわじわ近づいてくる、可愛さより恐怖を感じる。
「誰だってひどいな～。昨日お菓子食べちゃったのまだ怒っている

の？」
「それ以上寄るな！！　お前は何者だ？　誰が兄だって？　誰の妹だ？」
距離をとりながらいうと、女は顔を大きくゆがめた。
「う、うええ、お兄ちゃんの妹だよぉ」
「俺に妹がいるかっ！！」
当然の叫びだ。小さな子を泣かす罪悪感も芽生えたが、まだ恐怖が勝っている。父と俺だけのむさい男家庭で妹なんて華やかな響き……可笑しいぐらいだ。
自称妹が名残惜しそうに部屋を出て行くと、俺はようやく一息ついた。
しかし冷静に考えると奇妙だ、俺は夢を見ているのだろうか。自室に女の子なんて、彼女もいない、女友達もいない、そんな俺には初めての経験だ。
変質者なのか？　あの女の子の目的はいったいなんだったのか……。
それも今となっては分からない事だ。あの娘が家を出ているかどうか……。
そういえば父はどうしているだろうか。まさか娘がいたなんて言うんじゃなかろうか。
俺は苦笑しながら部屋を出た。

しかし俺の予想は当たり、期待は裏切られ、俺は茶の間でちゃぶ台を挟み父にこってり絞られていた。
「敬！　お前は妹を泣かして謝りもせんのか！！」
本当に父がそう言うとは思わなかった。
俺から見て左に自称妹がいるが、その後ろにはなんと自称姉までいた。
「困るわぁ……敬ちゃんったら忍だけじゃなくて、私の事まで忘れているの？」

青い長髪を指で弄る穏やかそうな女性。初対面だ。姉貴なんていうわけがない。

「なにそれっ！　私だけだったらいいっていうの！？　お姉ちゃんひどいよ！」

おさげの自称妹は忍といって、長い髪の自称姉は春（はる）というらしい。

「とりあえず私は学校行くから、あとはお父さんよろしくね」

春は手をひらひら動かして出て行った。知らない女に自分の父親をお父さんと言われると、こんなにもむず痒いものなのか……。

「父さんやっぱり分からないです。妹とか姉とか、意味不明なんですけど……」

「はぁ、さっきからお前は何を言っているんだ？」

説教じゃなくて正気を疑うように言われると傷つく、実の父親に。

俺は間違った事を言っていないはずだ。

「いいか、お前は灰国敬。今年で高校二年生になった。分かるな？」

「分かってるよ！　自分の事は……」

「お前が灰国敬なら、さっき行った女性が灰国春。今年で高3。あれがお前の姉貴ってことになる……あぁ、俺は何の説明をしているのやら」

「いやいや、そこがおかしいって言ってんだろ？」

「やかましいっ！！」

俺の意見は父がちゃぶ台を叩く音にかき消された。

「お前が灰国敬である以上、姉の春と妹の忍の存在も受け入れろ！！　これは父からの命令だ！！」

「んなムチャクチャな……」

横を向いて溜息をつくと、忍と目が合った。けどそれも一瞬で目を背けられた。涙目だった。

「大丈夫だ忍。この馬鹿も帰ってくる頃に全部思い出してるよ」

父の慰める優しげな声に、忍はぴょこぴょこと父の膝に座って、こくんと頷いた。

「それより父さん、仕事は？」

よく考えたら父は俺が朝起きる前に仕事で家にいないはずだ。それが今は登校のギリギリのこの時間までここにいる。普通だとありえない。

やっぱり夢なのか。やはり、そうに違いないな。

「仕事ってお前、忘れたのか？」

「な、何を？」

またとんでもないことを言うんじゃなかろうな。とは思うものの聞かないといけない。

「近くの学習塾の塾長をしているから、基本は昼まで家にいても大丈夫だぞ？　忘れたのか？」

忘れるも何も、そんな事実がない。

俺の父は間違いなく西條（さいじょう）グループという巨大会社の部長さんで、会社にいくため必死こいて満員電車に乗って行き、帰りは飯食って風呂入って寝るだけの、ガンシューをする暇すらない過酷な生活をしていたはずだ。

「学習塾ってなんだよ……」

「敬、本当にどうした？　医者行くか？」

ありえない。この世界はアレだ。いわゆる虚構（きょこう）の世界とかいう何かだ。

それとも、パラレルワールドとか。俺はどこかのパラレルワールドの自分と入れ替わっちまったんだ。

それしかない。そうに違いない。

ふらふらと鞄も持たず学校に向かう俺を、父は呼び止めた。

「おい敬！　今日は紅華（こうか）ちゃん待たないのか？」

コウカチャン？　わけも分からず玄関に行くと、玄関扉のガラスの向こうに人影があった。

うっすら見える緑のセーラーと赤いリボンは、我が金崎（かねざき）高校の女子の制服、それも二年だと分かるが……。

謎の女子が玄関の戸を先に開けた。

「あ、敬くんおはよう。今日は早」

「父さん！　この人は！？」
彼女が言い切る前に俺は叫んだ。俺は知らない、が、凄く好みだ。体は細く引き締まっているのに、出るとこは出ている。間近で見る長い茶髪は、意外と爽やかな香りを放っている。
「お前、紅華ちゃんまで……ちょっと来い！　座れッ！！」
恐ろしい。もう何がなんだか分からなくなってきた。
言われるがまま父の元に向かうと、紅華さんもついてきた。
「えっと、どうしました？」
俺が丁重に尋ねると紅華さんはプッと噴出した。
「何その聞き方？　初対面ごっこ？」
笑顔が輝いていらっしゃる……、間違いなく初対面なのに、とてもフレンドリィな人だ。
そのまま二人で父さんに向かって座ると、忍が動いた。学校に行くらしい。
「あ、忍ちゃん、行ってらー」
「あっ……行ってきます、紅華お姉ちゃん……」
伏し目で、語尾は消え入りそうな声だったが、最後まで聞き取れた。
「どうしたの忍ちゃん？　元気なかったみたいだけど？」
「紅華ちゃん、おかしいのは忍じゃなくてそいつなんだ。全く十七にもなってばかばかしい」
「それってどういうことですか？」
父の挟んだ言葉に反応した紅華さんが、疑問の言葉と視線を向けてくる。
「俺にもよく分からん。とりあえず学校が終わったら病院に連れて行くつもりだ」
是非そうしていただきたい。いっそ今すぐでもいいぐらいだ。
「敬くんどこか悪いんですか！？」
耳元で大きな声を出されたのに、不思議と心地良い。
「まだよく分からんが……とりあえず紅華ちゃん、こいつを学校に

連れてってくれ」
紅華さんは不服そうに頷いて、俺の手を引っ張った。
小さくて、暖かい手だ。指の一本一本が俺の手に絡んでくる。
恥ずかしくなって手を振り払った。女子に触ったのなんて小学生以来かもしれない。
俺が恥ずかしがっているのを見て、紅華さんは困惑しているみたいだ。
「馬鹿……何恥ずかしがってんのよ？」
先に先にと早歩きした紅華さんの頬も、赤くなっているように見えた。

微妙な距離感のまま紅華さんと学校に到着。
金崎高校自体は何も変わっていない。正門前に集まる教師達、チャリ通と徒歩が入り乱れて教員の駐車スペースがあって……説明するまでもないことだ。
だがとても嬉しかった。もしこの高校まで何か変わっていたらどうしようかと緊張していた。
俺があまりにきょろきょろしていたのか、教師の一人が声をかけてきた。
「どうした灰国？　まるで始めて来る学校みたいにして？」
数学教師であり、我が2年2組担任の曽村虎雄（そむらとらお）だ。小汚い無精ひげも暑苦しそうなスーツも何も変わっていない。
「いえ、別に何も……」
「敬くーん、遅いよー」
紅華さんが大きな声を出して手を振って……って。
紅華さんは恥ずかしくないのか？　登校中の生徒達に教師達が一斉にこっちとあっちを見る。俺はもう顔から火が出そうだ。
「お前と西條はいつも仲がいいな。俺もそういう幼馴染欲しかったよ」
西條……、西條紅華、西條紅華（さいじょうこうか）か！

迂闊だった、思い当たった。
昨日までの父さんがよく言っていた。
『西條グループの一人娘はお前と同い年なんだよ』と、『エライべっぴんさんらしいよ』と。
西條の一人娘と幼馴染かぁ！　これはもう将来安泰だな！　アハハハハハハ！！
「灰国？　どうした灰国！？」
「すみません先生。もう、わけが分かりません……」

## 一章・姉と妹と幼馴染（後書き）

駄文ですが読んでいただけたとしたらありがとうございます。
褒めてもらっても貶してもらっても構わないです。

# 二章・知った友人と知らない友人と消えた友人

さらに紅華さん……いや、西條さんと距離を開けてようやく教室に辿り着いた。

教室、異常なし。生徒……まだ人数は少ないが、西條さんがいる以外異常なし。ほっと一息つけた。

これ以上もし何か問題があったら、間違いなく精神崩壊してるわ。もう、やってられんわ、急に関西弁モドキになるぐらい、やってられんわ。

クラスメイトを一通り見て……親友を見つけ駆けつける。

「杏！　お前は無事だったか！！」

「敬か、お前何言ってんの？　どういう意味？」

俺はそこにあった１２８センチ・３２キロを担ぎ上げた。

中身はド変態のくせして、性別以外は小さな美少女という奇跡の塊。

正真正銘の男子高校生『異瀬杏』様は無事で何も変わっていない、それだけで満足だ。

「杏、俺はもうなんか大変だ。もう駄目だよ」

彼がいるとここが金崎高校だと実感できる。その杏は若干引き気味だが。

「敬、お前キャラ変わったな……」

「俺が変わったのかそれとも世界が変わったのか！？」

「何の話だよ……」

唖然とするクラスメイトを無視して、時計を見てＳＨＲまで時間に余裕があることを確認し俺は話を始めた。

「杏、今朝からの不思議体験を聞いて欲しい」

俺の真面目な空気が伝わったのか、杏もその愛らしい小さな顔を引き締めた。

「……俺が助けになるなら」
そして俺は全部（と言っても朝から登校までの短い時間だが）を話した。
いなかった妹と姉と幼馴染の事、職が変わった父の事、丁寧に一から全てを話した。
それを全部を聞き終わって、杏は口を開いた。
「最初から全員いたじゃん」
「だ・か・ら！　いなかったんだよ」
杏は軽く笑いながら「冗談だよ」と付け加えた。
「お前の言っている事はにわかに信じがたいというか信じていないが、まぁ事実だとしよう。すると問題はまず紅華のことだな」
「いや、どれも真剣な問題だ」
「いいから聞け。紅華は確かに昔のお前の世界に、お前と面識はなかったが存在した。お前の姉と妹は存在があったかどうかも定かではない、つまり増えた女性の中で少し差があるんだ。鍵を握りそうだと思わないか？」
混乱した頭で考えてみる。確かに前の父さんが言っていた名前も間違いなく西條紅華だったと思う。この世界でも西條紅華という名前であることも確認済み。
そしてどちらも大企業の一人娘だという立場に変わりない。
「次に、お前の父親の仕事が変わった件だが……おそらく、不都合を修正するためだ」
「どういうことだ？　不都合って？」
「紅華は西條（さいじょう）グループの一人娘で少し偉い人、社員から丁重に扱われる存在である。そしてお前の昔のお父さんはそのグループの社員だ。するとお前の父さんが西條グループの社員のままだったら紅華にヘコヘコしなければいけないわけだが……それじゃいけないよな？　お前の親父がヘコヘコしている人物にお前は気安く話せるか？
口説けるか？　だからお前の父さんの仕事は西條グループの管理職からそこらの塾長に変わらなければいけなかった。あくまで推測

だけどな」

「どう『だから』なんだよ。つうか口説くって……」

やっぱり意味がわからない。その不都合は俺にとっての不都合じゃないだろう？　なら、いったい誰にとっての不都合なのか？

「つまりお前の父の仕事が変わったのは、『西條紅華』という仲の良い幼馴染を作る下準備だ。そして、お前の元に現れた三人の女。これが意味するのは……」

杏のつぶらな瞳に確信が宿っている。

「お前に新しい世界で女遊びをして欲しいに違いない！！」

ビシィッと突きつけられた指を、俺はきっと物凄くマヌケな顔で見ていたんだろう。杏の顔が真面目に不機嫌になっている。

「なんだその顔は？」

「お前は今も昔も変わっていないよ……」

底抜けの馬鹿でエロイ事と女の事をしか考えていないところ、何も変わっていない。こいつの何が駄目かっていうと、その答えが絶対だと信じて疑わないところだ。

「あのなぁ、誰がそんなことを考えるんだよ？」

俺が声に怒りを混ぜていうと、杏は真面目に意見をつらつらと述べた。

「まずお前の記憶に問題がある場合、これが確率高いと思うがお前はそれを信じないだからなしにしよう。次に宇宙人的な未知の敵がお前の姉と妹として侵入したとすると、元のお前の世界にいたはずの西條が加わるのはありえないのでボツ。残りはさっきいったパラレルワールド的なのか、超常現象しかない。そうなると悪意もへったくれもないから、そういうわけで楽しい風に考えろよ。妹と姉と幼馴染が一日で手に入るって俺、羨ましくてたまらないよ」

杏は意外とちゃんと考えてくれているみたいだが……これでは解決とはいえない。

「なぁ頼むよ、元に戻る手段は……」
杏がジトッとした目で見てくる。なぜか少し怒っているらしい。
「まだ情報が少ない、また今度だ。そもそもそんな状況にもなって元に戻りたいとか言う奴の気が知れん。俺だったら喜んでハーレム作るね。誰だってそうする。きっとお前以外はそうするよ」
お前だけだろ――と言おうとしたがその次の言葉を失った。
なぜなら教室に入ってきた男を見て呼吸を忘れるほど驚愕したからだ。
おかっぱ頭の上にモヒカンのような髪が生えている。顔は童顔で背はそれほど高くない。
何に驚いたかといえば、そいつが金崎の学生服を着てこの教室に堂々と入ってきた事だ。
「おはよう雨宮(あめみや)！　ほら敬、雨宮は覚えているだろ？」
杏が指差して、ようやくその男が雨宮だということに気づいた。
だが、そんな男は人生で初耳だ。見たことも聞いた事ももちろんない。
「いや杏……誰だアイツは？」
雨宮は前の世界で異瀬杏が座っていた席に、その鞄を置いてこっちに来た。
「おお、杏に灰国、元気しとったか？」
気さくに話しかける初対面を無視して、杏は俺に疑惑の視線を向ける。
「敬、お前、雨宮を知らないってのか？」
「あの席はお前の席だろ？　お前の」
俺が思ったままを言うと、杏は正気を疑うように。
「俺の席？　俺の席はあっちだぞ」
と言って指差したのは、俺と杏の親友であった『不同大吉(ふどうだいきち)』の席だった。
「あそこは大吉の席だろ？　不同大吉」
「不同大吉？　誰だそれ？」

「ワシを華麗にスルーせんでくれ。何の話じゃ？」
今はモヒカンの喋り方以上に杏が不同を忘れている事が何よりの驚きだった。
杏は普段ずっと大吉と犯罪すれすれの事をして俺を巻き込んでいた。
その大吉がいなくなり雨宮とかいう知らない奴が変わりにいる。
まるで自分の世界が全て壊されていくようだ。
「杏よ、灰国はどうしおったのじゃ？」
「分からん。分からんが……俺までもやもやしてきた」
そして杏は俺に向き合った。
「敬、俺は重要な何かを忘れているのか？　それともお前が狂っただけなのか？　俺は……いや、とりあえず、その不同君の話をしてくれ」
戸惑う雨宮を放置して、俺は覚えている限りの不同大吉について話した。
「まず不同は身長が確か２３０センチ以上、体重が１３０キロを超えてたな、七月一日生まれのかに座でエセ侍口調の……」
「ちょっと待てお前、それ本当に高校二年生、いや人間か？」
「おいおい灰国、一体全体なんの話じゃ？」
杏の新鮮な反応、見ず知らずの雨宮の反応、どっちも胸が痛んだ。
いつも杏は小さい自分と大きな大吉の除け者仲間として本当に仲良くやっていた。
それなのに、今の杏の反応はまるで大吉のことを知らない一般人と同じ反応だった。
昔、俺が大吉に『お前はそれで高校生か？』と言ったら杏はすぐさま『俺にも同じことを言うんだろ？』と庇っていたのに……それが、こんな……。
「杏、灰国、さっきからワシを無視するな！！　それはいったい誰の話じゃ！？」
雨宮のモヒカンが揺れ、おかっぱがふわりと開く。

「杏、そいつについて知ってること全部言ってみろ」
「雨宮隆二（あめみやりゅうじ）、喋り方の変な高校二年生。身長は……」
杏は言葉を詰まらせた。
「あれ？　体重、誕生日、血液型……なんで……？　分からない……」
杏の顔は蒼白になって、冷や汗までかいている。
「おいおい杏、どうしたんじゃ？　ワシの誕生日分からんて……」
「お前は言えるのか？」
頭を抱えて唸る杏の代わりに訊ねる。
胸の中で膨らんでいた世界への疑問が、個人に対しての疑いになっていく。
「誕生日を忘れる高校生がおるか！！　姓が雨宮！　名が隆二！　誕生日が」
雨宮は口を開いて動かない。
「えーっとぉ……誕生日じゃったな、誕生日、誕生日っと……」
怪しい。なにか、こいつにはなにかがあるのかもしれない。
そのまま口笛を吹いて歩き出す雨宮に掴みかかろうとすると、杏に腕を掴まれた。
「待ってくれ敬……間違いなく雨宮は俺の友達だ……」
杏の手は力が弱くて、今にも泣き出しそうな震えた声だ。
「頼むよ……別にハーレム作りゃいいじゃん……この世界を壊す必要ないじゃんよ……。分からないけど、怪しくても雨宮は間違いなく親友なんだよ」
俺は、胸に感情を抑圧したまま、一歩も動けなかった。

授業中、今日はずっと普通のクラスメイトと喋らず、授業も熱心に聴かずこの世界について考えた。
幸い席はクラスを一望できる一番後ろ、じっくり教室の状況を見ながら考える事が出来る。
たまに雨宮や西條さんが話しかけてきたときは軽くあしらった。

二人ともが優しげで本当に心配してくれているみたいだけど、今の俺にとって親しくしすぎるのが問題な気がしたからだ。

休み時間や下校中は杏とこの世界について詳しく話した。今見つかっている差分は、『俺の周りの女性3人』と『不同が雨宮に』の2つが大きい。

父さんの職業は辻褄合わせとして判断すると杏の言。

辻褄合わせとはそのままの意味でもあるが、俺と杏の間で用いられる、変化のための変化という造語でもある。

そして辻褄合わせは父さんだけではなかった。俺の偽姉こと春さんがこの新しい世界で生徒会長をやっているらしく、前の世界での生徒会長『倉橋麻友（くらはしまゆ）』が消えたのも辻褄合わせだと判断された。

関係ないんじゃないか？　と俺が訊ねると杏は十分ほどかけて生徒会長という属性のなんたるかを語りだした。俺はやむなく倉橋麻友を辻褄あわせとして判断する事にした。

だが、そう考えると大きな問題は一つ残る。

「もしこの世界が俺に、その、いわゆるギャルゲーを味わって欲しいんだとしたら、辻褄合わせは分かるが、不同が雨宮に変わる意味が分からないな」

帰り道、自転車をこがずに押して歩きながら俺が聞く。

これぱかりは何の辻褄合わせでもない、姉、妹、幼馴染と何の関係もない変化だからだ。

すると杏は指を二本出した。

「一つは雨宮が黒幕。そうすれば誕生日不明事件の謎が解ける。まぁ不同と成り代わったのはお前と仲の良い、都合のいい人材だったからだろうな。近くで観察できるとかいって？」

あの時は涙目で小動物のように雨宮を庇ったのに、今になってあっさり切り捨てやがった。

だがそんな風に正直に考えてくれるのは、杏が頼りになる証拠だ。

「もう一つは……雨宮が男の娘（こ）、もしくは男装の麗人（だんそうれいじん）で実は攻略対象の一人だという可能性だ」

確か男の娘って男だろ。攻略対象じゃないだろ。
それに麗人と言ってもあの声は間違いなく男のものだった。となると攻略対象なんかじゃないはず。そして俺は同性に対してそのような不埒（ふらち）な感情は持たない。
「そんなこというお前の方がよっぽど攻略対象だろ。見た目的にも声的にも」
すると杏は頬をポッと朱に染めた。
「馬鹿！　俺は男だからな！！　そんで、自分でいうのもなんだが、俺を対象としたら見た目が年齢制限アウトだぞ」
１２８センチは確かに……アウトだろうな。
のんびり歩いていたが、ついに別れるところまで来た。
「いいか敬、この世界の問題はお前だけが困っているところだ。味方が一人もいないけど、一人で頑張るんだぞ」
そして杏は自転車に乗って走り去った。
確かにこの境遇に遭っているのは俺だけだが、味方は間違いなく一人いる。そう思うと気持ちが幾分もマシになった。

## 二章・知った友人と知らない友人と消えた友人（後書き）

これで役者は全員揃いました。

# 三章・この人いたっけ？この人いなかったっけ？

家に帰ると、もう偽妹こと忍（しのぶ）が帰っていたようだ。父さんはどこかの塾で頑張っているのだろう。

俺が「ただいま」と言うと忍は顔をパッと輝かせて走ってきた。

「お兄ちゃんお帰りっ！　えへへっ、お風呂にする？　ご飯にする？　それとも……えへへ」

「あ、すいません。まだ分からないです」

朝冷たくされた兄と楽しく過ごせると思ったのだろうか、俺に見放されて忍はガクッと落ち込んだ。

「……そう」

忍は落ち込んだまま茶の間の隣にある和室に入った。

何をするのかと思い、和室の扉を開くと……そこは和室じゃなかった。

「おい！？　これどうなってんだ！？」

「え！？　何が？」

俺の記憶が正しければここには本棚と薄汚いテレビと家具があるだけの、畳の部屋だった。

それが今ではフローリング張り、おしゃれなレースのカーテン。ピンクのベッドまである。

「どうなってんだって……あたしの部屋だよ？」

あたしの部屋、ってやっぱりこいつの部屋だという言葉のままの意味か。

和室がなく妹の部屋がある。当然っちゃ当然か。これは、杏のいうところの辻褄合わせだろう。

「それじゃやっぱり、春さんの部屋もあるのか？」

ふと浮かんだ疑問を投げかける。忍は正気を疑うように答えた。

「えー……、あるけど、お兄ちゃんの隣の部屋だよ？　気づかなかった？」

言われてはっと気がつく。そういえば俺の隣の部屋には物置があった。

だがそれはおおよそ女性の部屋になりえる状態ではない。ごみと、流行が去った昔の玩具が散乱する埃と汚れにまみれた不浄の空間だ。

それに、この忍の部屋は見た目こそ違うがサイズは確かに和室のものだ。

あそこは人が住めるサイズじゃない、せいぜいベッド一つが入るか入らないかだ。

ひとまず忍に感謝の意を示して、俺は元物置に向かう事にした。

物置は俺の部屋に繋がっているし、廊下から直接入ることもできる。昔はよく俺の部屋から入り込んで昔の玩具で遊んだものだが……。

自分の部屋から扉を開く。その瞬間、鼻腔にふんわりとした空気が広がった。

その、なんと綺麗なこと。黒に近い灰色の床は、黄色い新築の木のように変わり、壁なんて積まれたダンボールで見えなかったのに、滑らかな壁紙に窓までついている。そこから差し込む夕陽が教科書や分厚い本が入った本棚を紅く染めている。

大リフォームどころではない。これではまるで別物だ。そもそも断然広くなっている。

いけない事と思いつつ、少し中に入ってみる事にした。

本来の俺なら女性の部屋に無断で入るなど不埒な行動を取るわけがないのだが、現在の混乱を収めるべく仕方なく入ることにしたのだ。決してその芳香に惑わされたわけではない、多分。

意を決し入り込む。勉強机の上にあるペン入れ、置きざりのノート。その後ろには洋服を入れたタンスのようなクローゼットのような家具がある。

忍の部屋が『女の子の部屋』と呼ぶなら、春さんの部屋は『できる女性の部屋』といったところか。

一冊、本棚から分厚い本を手にとって見る。うわ、洋書だ。全然読めねえ。

「それは今映画化とかしている作品の原本よ」

いきなり声を浴びせられて振り向く。

俺の部屋になぜか春さんがいた、しかも制服のまま。胸のリボンがベージュだから、3年というのは確からしい。

「忍ちゃんが私の部屋にいると思うって言ったから、驚かしてみようと思ったの～」

俺が質問する前に春さんはイタズラっぽく微笑んだ。

改めてよく見ると、この人もかなりの美人だ。制服の胸の膨らみとかが想像力をかきたてる。

「で、愛しのお姉様のことは思いだしたかしらぁ？」

そういって春さんは俺のベッドに腰かけた。うーん、色っぽい。

「すいませんが、まだ何も朝と変わっていないです」

そう謝罪をすると、彼女は溜息ついでに聞いてきた。

「そう……、うーん、じゃあ私の部屋はなんだったの？　私がいないのに私の部屋ってことはないでしょ？」

「え？　物置ですけど」

それを聞いて春さんはちょっとの間だけ真顔になって、すぐに声を出して笑った。

「何それ～？　敬ちゃんのお隣には廊下と自室につながる高性能物置があったの？」

馬鹿にされたような気がしカチンと来るが、そういえば確かに、物置ってなんだ、物置って。

おかしい。俺の隣の部屋には物置があったはずだ。それは確かなはずだ。

しかし、現実的に考えてどこの家なら家の中の一部屋を、それこそ外にある荒ら屋のような物置として使うだろうか？

そんな家は普通ない。そして俺の家は普通だったはずだ。

記憶を呼び覚ましてみるが、俺の部屋から扉を開けて、物置……。

イメージできない。おかしい、なぜかさっきまでの物置へ通じる感じが掴めず、全て姉の部屋に通じるようになってしまった。
「可笑しいなぁ。あれ、敬ちゃんどしたの？」
声をかけられて過剰に反応してしまって、驚かしてしまったみたいだ。
目の前の女性を改めて見つめる。もし物置が嘘の記憶だとしたら、ここは元々『姉の部屋』という事になる。

つまり、この人は本当に俺の姉、ということになる。

「じっと見つめて……思いだしたの？」
俺は首を横に振った。確信が持てない。
けど、真相に一歩近づいた気がする。
と、言うか、もしかして本当に俺の記憶がおかしいだけなのか？
俺が自分で変な記憶を創りだした、それだけなんだろうか。
いや、ただの記憶喪失なら妙な改竄はないはずだ。どういう記憶喪失をすれば父の職業を大グループの部長など贅沢なことが言えるのか、ただの記憶喪失なら言えないはずだ。
この世界は真実なのか、それとも虚構……ギャルゲ妄想の世界なのか……。
どちらにしろ、まるで神様とか魔女とか、それこそ杏が言っていたような宇宙人とかの神秘の力が利用されているのかもしれない。
とりあえず、姉の事に関して杏と話がしたい。
「じゃ、姉さん。俺ちょっと出かけてくる」
「ん、いってらっしゃい」
姉さんはベッドに腰かけたまま笑顔で送り出してくれた。
とても暖かくて、優しい笑顔だった。

自転車を漕いで約十分。
俺が異瀬杏の家だと思っていた場所の表札は、雨宮と書かれてい

た。

さてさてこれはどういう事だ？

まさか高校生にもなって、迷子になるなんて誰が予想しただろうか。

日が沈みかけている。オレンジの空は紫色を帯び、文句なしの美しさだ。

「さて、これからどうしようか」

ぽつんと、独り言。返事は当然ない。あったら怖い。

俺が一番付き合いの長い親友の家を間違えるわけがない。十年通っていた道、電灯や月明（げつめい）がなくても間違えたりするわけがない。

だったら、これも新しい世界の改変だろう。

それにしても、これは『辻褄合わせ』だろうか。

もしかしたら、異瀬家は元不同（ふどう）家にあるのかもしれない。そこ以外に見当がつかないだけだが。

席で考えると、異瀬の席が雨宮の席に、不同の席が異瀬の席に、そして不同の席が消える。

その流れだと、異瀬家が雨宮家に、不同家が異瀬家に、そして不同家が消える。

なぜローテーション？　雨宮と不同をそのまま入れ替えればいいだけだろう。

いや、待てよ。

異瀬杏という人間は、元から居ただろうか？

いや、それは流石に考えすぎだろう。俺は彼の細かい過去を覚えているし、彼の身長体重だって覚えていた。彼の存在を疑うぐらいなら自分や灰国定、クラスメイトの全員だって、近所の人達だって皆疑わしくなる。

それに姉や妹の記憶を消すのは簡単に出来たとして（それすら常人には不可能だが）記憶を植えつける方が断然難しいはず。

疑うのも姉の相談をするのも止めて、いったん雨宮の家を調べてみよう。

不同の代わりが雨宮ということなら、この世界では雨宮と俺は大親友であるはずだ。今日学校で冷たい態度をとったところで、今『いやぁ今日は悪かった、ちょっと家ん中入ってもいいか?』ぐらい言えば問題ないだろう。

意を決しチャイムを鳴らす。やっぱり杏の家と同じ音だ。

「どなたさんですか?」

インターフォンから流れてきたのは、聞きなれていない親友の声だ。

「えっと……灰国敬ですが」

しまった、堅すぎる。親友として来たのに。

「あー、うん、分かった。我が家で思い出探しでもするんだろ?記憶喪失さん」

随分癇(さわ)(かん)に障る言い方だ。玄関で顔を合わせたら文句の一つでも言ってやろうと思ったが、玄関に顔を出した彼の顔は、今にも泣きそうだった。

「全く、お主は酷い奴じゃ。杏はしっかり覚えとるのにワシの事をすっかり忘れるとは……」

はぁ、と目を隠すように、彼は額に手を当てた。

「……あがらんのか?」

声が震えていた気が、しないでもない。

門扉(もんぴ)から玄関、廊下に皆で遊ぶ部屋、全てが元の異瀬家のものと変わりない。

「雨宮、家族は? あとアルバムとかみてみたいんだが……」

「家族はおらんし、ワシが写真嫌いだということも……まぁ覚えとらんわな」

「家族がいない? じゃあどうやって高校に通っているんだ? それにこの家だって……」

彼は鼻を鳴らし自慢げに言う。

「スポーツ推薦に奨学金じゃろ、そして日々のバイトとカンパじゃな！」

本当にそれで暮らしていけるのか？　やはり圧倒的に怪しい男だ。

「何のスポーツだ？」

「水泳じゃ。忘れたか？　『金崎（かねざき）の雨夜（レインナイト）の鮫（シャーク）』という二つ名を」

……、雨宮が赤くなっている原因は、悲しみの涙だけではないだろう。

結局この日は家に帰り、親父にこってりと絞られて自称妹に泣かれ、終わる事になった。

自宅のアルバムには雨宮と杏はいたが、不同はいなかった。

# 四章・二日目と黒幕

次の日、ノックの音で目が覚める。午前七時だ。
もう上に飛び乗っては来ないらしい、扉を半開きにして忍(しのぶ)は顔を覗かせている。
「……おはよう」
「ああ、おはよう忍」
一瞬、辛そうな顔をしたのが見えたが、すぐに彼女は顔を背け走っていった。
やれやれ、居心地が悪い。
茶の間では、今日こそ親父に医者に行こうと言われ、妹には泣かれ、姉には適当に扱われ、本当に居心地が悪い！
そして登校の時間になると、玄関のガラス戸を叩く音が聞こえる。
「敬(けい)くん起きてますかー？」
これぱっかりは居心地が悪くない。いかにめちゃくちゃな状況下であっても、彼女がいることだけは大きな利点といえよう。
「おはようございます、西條(さいじょう)さん」
紳士的な態度で俺が玄関戸を開けると、彼女はプッと吹き出した。
「だから初対面ごっこはやめましょうよ。ほら」
彼女が手を差し出す。これは……手を繋ごうという意味しかあるまい。
しかし俺は無愛想にその気持ちを無視し、前へ躍(おど)り出(で)学校に向かう。
「遅刻しますよ西條さん」
……、素敵な女性だし、憧れを持つ。けど仲良くするわけにはいかん。
たとえどんなに素敵な女性でも、それが虚構(きょこう)のものであるなら話は別、ギャルゲのヒロインを本物として扱う男性がどこにいるだろうか。いや異瀬(いせ)という奴がいるが……。

……もし、万が一俺の記憶に間違いがあって、本当に西條さんが俺の幼馴染だとしたら、俺は今とても失礼な事をしている。

昔の俺は本当に彼女と仲良くしていたのか。だが彼女と仲良くする俺は、もはや昔の俺ではなく新しい俺だ。いや待て、昔の俺なんていないはずだ。俺は昔も今も同じだ。つまりは……？

ああ、珍しく難しいことを考えすぎて自分でもわけが分からない。俺の記憶が戻ったら……。

いやいやいや違う！　記憶がおかしいんじゃなくて世界がおかしいんだ！　俺は正常なんだ、何者かが俺を中心に世界を改変して……。

いや、この言い方では本当に俺がオカシイ奴になっているな。

とりあえず西條さんとの一時（ひととき）でそんなことを考えるのは止めよう。

今までどおり、前の世界とこの世界の差異を探せばきっと何かを取り戻せるだろう。

と、俺が必死になって平静を保っていると、急に後ろから抱きつかれた。

何者だ、と叫ぶまもなく背中に触れた柔らかい感覚に、俺は耳まで真っ赤になっただろう。

「敬くん、紅華（こうか）って呼んで？」

耳元に暖かい息が当たって背中がゾクゾクした。

首元に手が回されギュッと締まる。これが幸せ死の前兆なのかもしれない。

「ささささささ、西條さぁん！？」

ようやく彼女は両手の拘束を緩めて、少し距離をあけてくれた。

「わっ、敬くん真っ赤だね。でも昔はこんなんじゃなかったよ」

彼女はいかにも真面目な表情になり、右手の示指（じし）を突き上げて言った。

「昔はいつも手を繋いで登校して、皆から口笛吹かれて、で満更（まんざら）でもない顔をするの」

その図のなんたる想像しやすさ。昔を知らない俺でも全く同じ事

が出来るだろう。いや、昔なんてないはずだから今の……やめよう。
落ち着いてきたところでやっと金崎高校に着いた。
いつも通り教師がいてチャリ通も乱れて、これだけはいつまでも変わらなさそうだ。

「杏！　いるか！？」
教室について早々、俺は他人の目も気にせず大声を出した。
「ここにいるぜ記憶障害、病院に行け」
思わず悲鳴をあげてしまった。
その本人はその体躯を活かしていつの間にか俺の背中に張り付いていたようだ。
「で、何か進展はあったのか？」
「それでは昨日、お前と別れた後の話だが……」
そして俺は姉妹の部屋問題と、親友三家問題について詳しく話した。
「なるほど、つまりお前の姉貴は本物っぽくて、俺と雨宮の家にケチをつけるわけだな」
「何か誤解されている気がするがそんな感じだ」
杏は顎に手をあて熟考する。いったいどんな言葉が出てくるのだろうか。
しばらく経ち、クラスも段々と喧騒を増す。
予鈴が鳴り、ようやく杏は口を開いた。
「分からん！　自分でなんとかしろ！！　以上ッ！！」
「ええぇっ！！　そんな事言うなよ、頼みの綱はお前しか」
「分かった、おすすめの総合病院と精神科でも……」
「もしかしてお前諦めてる！？」
しかし彼は何も答えず、愉快そうに自分の席へと向かっていった。
……これからどうすればいいんだろう。
その後ＳＨＲにて、虎雄がプリントを配り朝の報告を済ませると、雨宮と杏が揃ってやってきた。

「あ、杏、それに雨宮くん、どうかしたのか？」
「ザ・他人行儀じゃな！　敬よ、ワシの事はいつも通り呼んでくれ」
「金崎（かねざき）の雨夜（レインナイト）の鮫（シャーク）よ、どうかしたのか？」
「……」
雨宮はそっと顔を背けた。その代わりに杏が口を開く。
「いやなんだ、お前がかなり精神的に参っているとみて久しぶりに三人で遊ばないか？　って」
どうやら二人とも俺の事を心配してくれているらしい。
二人と分け隔てなく仲良くし、西條さんといちゃつき、四人家族で楽しく暮らす。
それはどれほど楽しい生活だろうか。
昔は父さんと不仲になり、それを隠しながら杏や大吉（だいきち）と過ごして、お世辞にも無上な人生とは言えなかった。
今の自分をなくしてしまえば全て楽になれるだろう。
ああ、そう考えたらとっとと諦めたくなってきた。
そもそも何が間違っているのか？　俺だってもう気づいている、宇宙人なんていなければ、神も魔女もこの世にいるわけがない。
おかしいのは俺なんだろう。姉だって妹だって幼馴染だって、雨宮だって昔からいたんだろう……って。
だから違う、と俺は学んだはずだ。
昔の、いや今の俺が知っている『倉橋麻友（くらはしまゆ）』と『不同大吉』がいるんだ。記憶喪失の都合の良いように作られた存在なんてあるわけがないんだ。
これは単なる記憶喪失なんかではないはずだ。悪の陰謀が関わっているとも思えないが……。
やはり時間が経つに連れて精神が楽なほうに楽なほうにと行ってしまう。
早く真相を解明せねば俺はこの世界で朽ちるかもしれない。
「何考えてんだ？　今日は遊びに行こうぜ！　ゲーセンとかさ！」
「じゃあお前の家に行こう」

ピタリと、杏の動きが止まった。
「どうかしおったか杏？　ワシもお主の家が広くて近くてよいと思うたが」
「いやぁ、今日は、だな。林檎が友達を呼んでるんだよ、だから無理だ」
「リンゴ？」と俺が反芻すると雨宮が「杏の妹じゃ」と応えた。
「ああ、林檎ちゃんね、そういえばそんなのがいたような気が……」
おかしい。俺と杏は親友だ。
なぜ俺は大親友の妹の存在があやふやになっているのか。記憶喪失の弊害か？　きっと違う。
「杏、俺は絶対にお前の家に行くぞ」
「いやだから林檎が……」
一時間目のチャイムが鳴った。ベストタイミングだろう、杏にとっての。
疑問が次々にあふれ出てくる。だがそれは心を不安にさせる気持ちの悪い疑問ではなく、まっすぐ正答に向かうための、清々（すがすが）しい疑問だ。
そしてその疑問を解かせるためのような、奇妙な事態が起こった。
世界史の教師が昨日と同じ事を言っている。時間割もよく見れば昨日と同じだ。
昨日時間割をあわしているときには気付かなかった。
みんなの反応は昨日と違ったのに授業の内容が昨日と同じとは……。
授業中にも関わらず俺は思わず立ち上がった。
「こら灰国！　なにを立ちあがっとる！！」
「あ、すいません」
結局すぐに座ったが教師の反応も、周りで笑ったり不思議がったりする生徒の反応も普通だ。
なのにみんな授業の内容が昨日と変わっていないことを微塵（みじん）も気づいていないらしい。

これはいよいよ、俺の記憶に間違いはないようだ。
間違っているのは、間違いなく、世界だ。

難なく授業が終わり、真っ先に杏がこっちに走ってきた。
「おい敬どうした!?　記憶が戻ったのか!?」
「いや、逆だ。俺の記憶に問題がないと確信が持てた。お前は気づかなかったのか？」
腕を組み「うーん」と唸るが、杏はすぐに手を広げた。
「気づかなかったって何に？　ユカタン半島がなんか可愛らしいって事か？」
俺は軽く笑い、自信に満ち溢れて言った。
「今日の授業は昨日と全く同じ内容だった。なのにお前らはそれに気づかない。つまりは俺に問題があるんじゃなくてお前達に……」
自分で言って、ようやく気づいた。
「どう考えてもお前の頭がおかしいじゃねぇか」
完全にドン引きしている。だが確かに、これでは俺がイタイ人ではないか。
「いや待て待て、じゃあ杏、昨日の授業と時間割を言ってみろ」
杏はまた、ピタリと動きを止めた。
その場しのぎのつもりが意外な効力を発揮したらしい。
「おい、言えないのか？　だったら俺が正しいって事になるな」
「思い出していただけだ。そもそも時間割がなんだ？　それがお前の記憶に何の関係がある？」
何故か声に怒気が含まれている。それに目つきもキツい。
「どうしおった、喧嘩か？　珍しいのう、二人が喧嘩とは……」
雨宮が闖入（ちんにゅう）して杏はすたすたと自分の席に座って行ってしまった。
「やれやれ敬よ、杏を怒らせるとはいったい何を言ったんじゃ？」
「いや、昨日の時間割と授業の内容を尋ねただけだが……」
雨宮は俺の言った事を耳に入れるや否や、杏とは比べ物にならないほどの『きょとん』を見せた。

「雨宮、どうした？」
「いや敬よ」
雨宮は何か思い切ったように、かつ不安げに言う。
「実はワシにはさっきの授業の記憶がない。何故かと聞かれても答えられんが、なんじゃろうな、まるで魂が抜けたようになっておったんじゃ」
わけがわからない。
「雨宮、何を言っているんだ？　お前は授業中には魂が抜ける物凄い遊び人だとでも言うのか」
「いやそうは言っとらん、板書も写しておるし、当てられたら答えることも出来る。じゃが……口では説明しにくいが、集中しておらん。言うなれば、全く集中しておらんのに、そんな風に授業が受けられるのじゃ」
雨宮の必死の説明も虚しく、その意味を汲み取る事が俺には出来なかった。
だがこの雨宮の困惑振りを見ると、試したくなる事が一つ増えた。
またも絶妙なタイミングでなるチャイム、次の授業も昨日と同じだ。内容まで。

二時間目の休み時間、俺は立ち上がり、自分から話しかけなかった人物にわざわざ話しかけることにした。
……だが、彼女に話しかけるのはとても勇気がいる。俺がどれほどの葛藤と努力を経てその経緯に至ったかは記さないが、是非理解していただきたい。
「なあ西條、ちょっと聞きたい事が……」
友達と話していたと思えない速度で彼女は振り向き、そのまま目と鼻の先にまで近づいてきて目を輝かせ喚いた。
「なになに！？　何でも聞いちゃいなさい！　そして紅華って呼びなさい！」
後の命令はともかく、言われたとおり何でも訊くことにした。

「さっきの授業で何か違和感がなかったか？」
そういうと彼女もまた、アリバイがない事に気づかれた容疑者のようにギクシャクした反応をした。
「ええと、そうね、敬くんじゃないんだけど、なんだか記憶が曖昧になっている気がする」
疑問はついに確信に変わった。

「ありがとう、紅華」
どうせこの世界に別れを告げるんだ、惚れた女を名前で呼んで何が悪い。
「敬く……ううん、敬」
……いい雰囲気になりそうだったが、生憎今から俺はこの世界の創造主であろう彼の元に問い詰めに行く事にした。
すぐそこにいる、小さな青年。
「異瀬杏、放課後、いや次の休み時間、ちょっといいか？」
彼は心底疲れた風に溜息をつき、俺を見上げた。
「別に今からでも事足りるよ、それに時間もかけないつもりだ。バッチリ諦める黒幕の方が格好いいからな」
「！！」
恐らくそうだとは思ったが、やはり一番の親友で味方だと思っていた奴に直接言われると、胸が痛む。
「杏……どうして？」
「あーあー、分かったんならあまり馴れ馴れしく喋るな。本当のお前と俺は初対面みたいなもんだから」
うわぁ、泣きそう。酷すぎる、今まで親身に解決策を考えていてくれた唯一無二の親友だと一応今でも思っていたのに。
杏が、いやこの人が黒幕なんだな……俺の混乱を創り記憶を消し、親友を消したり増やしたり……。
こいつ何者だよ？

ついてこい、と彼が言い、三時間目の授業が始まる中も堂々と俺達は何故か鍵の開いていた視聴覚準備室に訪れた。

「狭いとこだけど座れ、詳しい話を今するより、多分お前の記憶が戻ってからの方が良いだろう。だが記憶が戻った頃にはお前は元の世界に戻って全部思い出している。どうだこのジレンマ？」

「どうだ、と言われてもまだよく分からないんだ。お前は……俺の親友じゃないんだな」

落ち着いて息を整え、仕切りなおした。

「お前は何者なんだ、異瀬杏（いせきょう）。一体なんの目的で、どうやって、何をした？」

すると杏は笑い出す。

「お前それじゃ何も分かってないじゃん、つっても、それ以外は全部分かってますって顔だな」

今日はその場の机にあったコーヒーカップに、インスタントコーヒーを入れポットから湯を注いだ。

「なんでそんな物がここに？」

「俺が用意した、お前と腰を据えて話すためにな」

熱々のコーヒーを一口啜（すす）り、杏はようやく説明を始める。

「まず、目的を話そう。ずばり、この世界はお前の人間性テストのために作り出したのだ」

「人間性テスト？　……よく分からないが、合格なのか？」

「うーん、補欠合格かな。黒幕って気づかれたら合格にしようと思っていたが、まさか一日で分からないとは思わなかった。流石に俺も授業を二日分は考えていなくて諦めたよ」

よく分からないが、どうやら授業が二日とも同じ内容だったのはこいつが考えていないからしい。

だとしたらこいつは本当に神か何かか？

「じゃあ杏、一体どうやってこれをしたんだ？　お前は神か悪魔か、

それともなんだ？」
「魔術かな。そうだ、俺は魔女だー」
そういって杏はまた笑う。ふざけていやがる、まるで真面目さを感じさせない。
「あまり馬鹿にするな、こっちは真剣なんだ」
努めて冷静に、杏はまだ笑いながら、だが目は真剣に答えた。
「お前の最初の質問に綺麗に答えると……」
咳払いをし、コーヒーに口をつけ、また咳払い。
「俺は魔法使いで、お前の人間性テストのため、魔術で、世界を少し書き換えた」
「なるほど、と言うと思うか？　お前ふざけるのもいい加減にしろ！」
「詳しく説明するだけ時間の無駄だろ？　一番重要なのはお前が元の世界に戻れるか、それだけだと思わないか？」
「それだけじゃない、大吉や倉橋麻友はどうなった？　最初から存在しなかったのか、それともお前が消したのか？　姉貴や妹はどうなんだ、西條さんは、父さんの職業は……」
俺が興奮して杏に詰め寄ると、こいつは持っていたコーヒーカップを中身ごと俺に放り投げた。
「熱ッ！　このやろッ！！」
「悪い悪い、今から元に戻すよ。全部元通りのハッピーエンドではないが、今までどおりの平凡な日常に……、全部が幸せじゃないかもしれないが少なくとも不幸にはならないはずだ」
杏に掴みかかろうとすると、そいつは体から光を放つ。
俺は眩しさで、両腕で顔を包むが、そのまま意識を失った。

# 終章・帰還、日常は続く（前書き）

これで最後ですが、肩の力を抜いて読んでください。

# 終章・帰還、日常は続く

「うわぁああッ！！」

目が覚めた。

慣れ親しんだ我がベッド。部屋にあるテレビもゲーム機も勉強机も数年前から変わらないものだ。

そして、姉貴の部屋に通じる扉もある。

ガタガタと階段を駆け上がる音が聞こえ、勢いよく扉が開かれる。

「お兄ちゃ……って起きてるの？　珍しいね」

そうだった、俺には妹も姉もいる。おかしいのは俺だったんだ。

「し、忍すまない。今までの俺はちょっとどうかしてたんだ」

弁解のつもりが、忍は首を傾け、尋ねてきた。

「何が？　……ははーん、いつもいつも妹に起こされる兄貴ってのは、やっぱり恥ずかしいものですか、それなら自分で起きる努力をするんだね！　じゃあ朝御飯できてるから」

自信満々にそう言うと、忍はすぐに部屋から出て行き階段を下りていく。

あの反応は恐らく、いや間違いなく俺が他人扱いしていたことを覚えていない。

これも異瀬（いせ）の魔術的な、そういう力だろうか。それともあの数日自体がなかったことに……。

枕元の時計の日付を見れば確かにきっかり二日分巻き戻っている。

一階に下り朝食を摂りながら兄弟で話すも、確かにあの奇妙な日常はなかった事になっている。

もっとも、その事実が起こった日が未来なんだから当然といえば当然か。

姉や妹と話し、父の職業が西條グループの管理職だと確認した時点でようやく気が付いた。

俺にとって唯一嬉しかった出来事『幼馴染・西條紅華』なんてなかったことに。

その事を思い出した瞬間、さらに元の記憶が蘇ってくる。

俺の本当の友達、家の場所、アルバム。

ああ、なんということだ！

父に行ってきますも言わず、鞄を持ち俺は一人で学校に走った。

校門では相変わらず曽村虎雄やチャリ通生徒が入り乱れている。

何も風景は変わらない、俺はそれらをすり抜け教室に走る。

あの時、俺が記憶を改竄された時に真っ先に杏に声をかけたように、俺はベストフレンドの名を叫んだ。

「隆二！」

おかっぱモヒカンは変わらず呆けた童顔でこちらを見る。

「どうしおった敬、朝っぱらから大声で」

隆二からすればいつもと変わらない日常だが、俺にとってはその存在を忘れそのうえ非常に失礼なことをして……謝っても謝りきれないほどの所業をしたのだ。

込み上げる涙を堪え、俺は隆二に抱きついた。

「すまない！　本当にすまなかった！」

「本当にどうした？　何かワシに謝る事があったかのう……って何を泣いておるんじゃ！？」

感極まってしまい結局俺はボロボロと涙を流した。俺にも親友と呼べる者がいたんだなぁ……、その光景を遠目で見ている巨人がいる。

「敬殿、ついにボーイズラブにでも走ったでござるか」

身長２３０越えの、通称ビッグフット、エセ侍喋りが特徴の不同

大吉。

俺がよくつるんでいたのはこの二人だけだ。

異瀬杏なんて人間は、あの記憶でしか存在を知らない。

大吉と久闊を叙し隆二と親交を深め約二十分、チャイムが鳴りＳＨＲが始まる。

その時点でようやく、俺の二つ前の時代、つまり正しかった時代との差異が見つかった。

俺の席と隣の席の後ろに机があるのだ。

誰にも気づかれないように軽く笑った。姉と妹と幼馴染が増えて親友がソックリ入れ替わることと比べればたいしたことがない。大方転校生でも来るのだろう。

結局あの説明しようもない体験と謎の異瀬杏については何も分かっていないが、元の日常に戻っただけでもよしとしたい。

もし何かを間違えていたら俺はあの間違った迷宮から二度と戻れなかったのかもしれないのだから。

ようやく教室に曽村教師が来て、案の定転校生の話をした。

「実はだな、ある学校で爆発事故が起きてその所為でこの学校にも十人ぐらい転校生が来るんだ。本当は緊急朝会でも開くかって話になっていたんだが、皆この辺出身の子どもらしいからそういう説明なしでいいっつう判断が下った。仲良くするように」

そういって教室に入ってきたのは、見目麗しい美少女と、その妹に見えるほど小さな、学ランを着た女子小学生。

……。

「それじゃ自己紹介とかしてくれ」

二人はチョークを持ち、黒板に名前を書いていく。

だが俺にはなんと書かれるか分かっていた。

「西條紅華です、よろしくお願いします」

茶髪でありながら育ちの良さと気高さを感じさせる彼女は、あの時と何も変わっていない。

「異瀬杏だ。職業は学生で魔術師とでも言っておこう」
やはり本人だ。鼓動が波打つ。周りの奴らは驚き半分で笑っているが俺はそんな気分になれない。
「それじゃ二人にはあの後ろの席に座ってもらうぞ」
正しい歴史に戻ったのかどうか、俺には判断つけがたい。
俺の後ろに西條紅華が、そしてその隣に異瀬杏が座った。
異瀬杏の俺とのすれ違いざまの一言で、また戦慄した。
「放課後、いや次の休み時間いいか？」
そして、授業が始まる。世界史だ。

チャイムが鳴って早々、異瀬杏が話しかけてきた。
「それじゃ敬よ、視聴覚準備室は遠いからトイレの個室で二人きり、なんてエロスなステージでもいいかな？」
底抜けの助平、俺があの時に知っていた異瀬杏の特徴が当てはまる。
「ほほう、杏殿というでござるか、拙者は不同大吉と申して、このおかっぱモヒカンが雨宮……」
「大吉悪い、二人にしてくれ」
俺の真面目なトーンに、普段はふざけっぱなしの大吉も隆二を連れて教室の他のグループに殴りこみにいったようだ。
「では何から話すか……」
と言ったところでもう一人の転校生が、異瀬杏に乗っかる。
「杏くん、あの魔術師ってなんなの？　あんまりウケてなかったけど」
それなりに築かれていたシリアスな空気は一気に崩された。
杏が若干うんざりした顔で「やっぱり放課後に」と言った。俺も同意だ。

休み時間も昼食も転校生二人は引っ張りだこで、結局まともに話

す機会はそれっきりとなった。
なんせ西條さんのあの可愛さに加えて、異瀬のあの……可愛さ？があるからな。
待ち合わせ場所は決めていなかったが、教室にいても残る生徒がいるだろうからある場所だと予想してスタンバイしたところ、きっちりと彼は来た。
「おお、よく視聴覚準備室なんて分かったな」
「二人で前に話したからな」
そして、今回の事件の全貌を訊くのだった。

話せば非常に長くなる事間違いなしだが、ここまで付き合ってくれている読者様ならきっともう長さは関係ないだろう。なのできっちり簡潔に完結させよう。
まず異瀬杏とその幼馴染、西條グループの一人娘西條紅華は東第二高等学校にてオタク部なる不憫な部活で、日々不埒な活動を行っていたという。もちろん西條さんは巻き込まれる形でだ。
その際に異瀬は魔術に関するまゆつばな技術を手に入れ、挙句学校を爆発させたとか。
大量の学生が転校するのだから、生半可な爆発ではなかったのだろう。
西條と異瀬は地元がこの辺りということで、この公立金崎高等学校に来る事になったが、曲がりなりにもお嬢さまである西條紅華には殆ど誰でも入れるこの高校の空気が合うかどうか、果ては不良がいないかなどの諸事情心配になり異瀬杏は独自の技術（未来予知＆ハッキング＆ｅｔｃ）を用いほぼ百パーセント我がクラスの我が席の近くに座ると踏んだらしい。
そこで俺の人間性をテストし、二人の転校生に非道な行為を行わないかと奇跡の魔術を起こした。

まず、並みの人間と体格が大きく違ううえオタク趣味が通じる大吉と異瀬が成り代わり、俺と身近に行動する事によってその性質を見る。

ついでに俺から姉と妹と隆二の記憶を消し、その真相に気付けるよくできた人間かチェックして、西條にとっての異瀬を俺に挿げ替えて誘惑に負けない気力を確認したとか。

異瀬の、いわゆる魔力が持たなかったため、授業は一日分で、作られた異瀬家の表札が不同のままになっていたり、俺が異瀬の家族の事を知らなかったり、生徒会メンバーが実は春さんしか決まっていなかったり杜撰（ずさん）なところも多々あったとか（ちなみに倉橋麻友は現在副生徒会長である、あの世界で俺が副生徒会長を尋ねていればそれで世界は崩壊したとか）。

一通りこんなものだろうか。異瀬は自分の事を俺に詳しくさせるより何か他の部分に魔力を費やすべきだと問い詰めたい気持ちにもなったが、ここは閉口しておく。

小さな体から吐かれた大量の言葉を、満足するように異瀬は心地よい溜息をつく。

「あとなんか分からん事ある？　多分全部だと思うけど」

「そうだな、その世界作ったり記憶消したりってどうやったんだ？」

「詳しくは話せないが、二度とあんな奇跡的なことはできないだろうなぁ」

そういい彼は天井を見た。よほど偶然と無茶に頼ったのだろう。

魔術って便利な言葉だ。

「俺から、姉さんと忍の記憶を消す必要があるか？」

「それはもちろん、俺が羨ましいからに決まってんだろ！」

そう言ってサムアップしてきた彼の親指を俺は強く握り締めた。

「じゃあ隆二に関する記憶を消す必要は？」

苦しまぎれに杏はかろうじて呟く。

「それは、やっぱり、犯人が身近にいるって事をわからせるのと、

スケープゴートになってもらうの。お前に真面目に犯人探しして欲しかったからな」

ふーん、と微妙に納得しておく。

そして最後に。

「あのさ」

あの世界が作られた物だとわかっても、あの時得た気持ちは一切霞む事がない。

例えば頼りにしていた異瀬に裏切られた気持ちとか。それは今から拳骨で許す。

もう一つ、あの世界だけで得た、拭い去れない強い感情がある。

「……西條さんのことだが……」

「紅華がなんだ？　マジで惚れたのか？」

俺は頷いた。

「そりゃ無理だ。あの世界でのお前の立場は俺の立場。紅華が好きなのは今も昔もなぜか俺だ。灰国、恋心を踏みにじるようで悪いが、お前がどう伝えてもその想いは成就しない、と思う」

「……そうか、やっぱそうだよな。じゃあ歯を食いしばれ」

堅く拳を握り締めた。

俺だってあの世界で色々真面目に考えていて、日常生活は上の空だったが、他人の気持ちぐらいは分かるつもりだ。西條さんの心配してくれた気持ち、登校途中のアプローチ、まさにいつも一緒にいることが当然って感じの、離れるなんて想像もできないってレベルの仲。

あれは全部俺じゃなく、こいつに向けられたものだったんだ。

あんなものを引き裂けるわけがない。

自分の執念を拭うため、あの時の記憶と別れるため、渾身の力で拳を振り下ろした。

「うぎゃあ！！　いきなり殴る奴がいるか！！」

「どう考えてもお前が悪いだろ！！　うぉおおおお西條さぁあああああん！！」

結局恋が成就する事もなく、平凡な日常に憧れの女性と非凡な親友が増えるだけの結果になった。

けれど、あの魔術的空間の二日間できっと生きることにおいて重要な何かを得たんだと思う。

……何か、きっと何か得たはずだ。そうでないと骨折り損のくたびれ儲けにも程がある……。

## 終章・帰還、日常は続く（後書き）

言葉では説明しきれない不明瞭な点やいまいち綺麗に終わっていませんが
大目に見てやってください。
しかし四章がクライマックスだったような気も……

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1789v/

ある日見覚えのない姉と妹と幼馴染がいたら

2011年7月29日22時34分発行